

『唐話纂要』の「三字話」

奥村 佳代子

Study on *Towa Sanyo's* “Sanjiwa”

OKUMURA Kayoko

This paper first compares *Towa Sanyo* with *Towa Ruisan* and *Towa Bin-yo*, serving to point out that *Towa Sanyo's* *sanjiwa* (three-character words) have little to do with *Towa Ruisan* and *Towa Bin-yo*. Second, I will analyze the usage and combination of words of *sanjiwa* collected in the *Towa Sanyo*, and make a comparison between *Towa Sanyo* and *Toin Sanjiwa* used by Nagasaki *totsuji* translators. Through an examination of their characteristics, we will show that they superficially resemble the method of learning Chinese found in Nagasaki, but that there are essential differences between *Towa Sanyo* and *Toin Sanjiwa*.

キーワード：唐話 (Towa)、三字話 (three-character words)、唐話纂要 (*Towasanyo*)、
中国語学習 (Chinese study)、江戸時代 (Edo era)

はじめに

江戸時代を通じての唐話の様相を全面的に把握するには、唐通事によって実用された唐話と『唐話纂要』を嚆矢とする一連の書物に示された知識としての唐話のいずれをも含めて考える必要がある。

唐話は、本来は長崎の唐通事が自らが話す中国語を称して用いた呼称であり、長崎で学ばれ用いられていたと考えられる。岡島冠山によって『唐話纂要』が編纂され出版されたことから、広く世の中に知られることとなったが、岡島冠山の唐話には、同じ中国語であるとはいうものの、長崎唐通事の唐話とは異なる点が見られ、唐通事が唐話と称した言葉とは違うものであったと考えられる。

狭義に解釈すれば唐話は唐通事が実用した中国語だが、広義に解釈すれば江戸時代において、話された中国語であると看做された、あるいは話された中国語として記述されたものが唐話であったと考えられ、口語体の書面語である白話に対する理解を助け、江戸時代の文芸や学問に影響を及ぼしたものは、狭義、広義を問わず、唐話の知識であった。

筆者は、岡島冠山の唐話資料は、広義の唐話ではあるが狭義の唐話に近い位置にある中間的な資料として位置づけている。『唐話纂要』『唐音雅俗語類』等の一連の資料は、荻生徂徠らが中心となった訳社での唐話講習を踏まえて出版されたものだと考えられるが、岡島冠山の存在なくしては出版されることはなかっただろう。岡島冠山の唐話資料を特別扱いする必要はないかもしれないが、筆者は、時代的に見れば、岡島冠山以降唐話の存在が日本人の間に広まり、その結果白話が日本の文芸、学問の世界に吸収されたという見方をしており、岡島冠山編纂の一連の唐話資料は、唐話が唐通事占有の言葉から江戸時代の日本人共有の知識としての言葉となるまでの過程の中間的な存在であったと考えている。この考えに基づき、岡島冠山の資料の中で唐話として取り上げられている言葉やその日本語訳から、江戸時代の日本人が捉えた唐話の原点を見いだす手がかりを探っていきたい。

岡島冠山の名前と唐話という呼称を冠せられて出版された資料には、どのような共通点と相違点が見られるだろうか。本論は、岡島冠山の唐話資料における三字話に焦点を当て、『唐話纂要』を中心に三字話がどのような語で構成されているかを整理し、『唐話類纂』及び『唐話便用』との語句の一致状況を調査し、岡島冠山の資料における三字話、また唐話資料における三字話というまとまりの持つ意味を知るための基礎作業を行う。

1 冠山資料に見られる異質性

岡島冠山編著の唐話資料は『唐話纂要』（享保元年（1716）初版5巻5冊、享保3年（1718）6巻6冊）以降、『唐音雅俗語類』『唐譯便覽』（共に享保11年（1726））、『唐話使用』（享保20年（1735））等が出版された。岡島冠山は享保3年（1718）に亡くなっており、それ以降に出版された書物は、生前の成果や蓄積が死後に出版されたということになる。また、出版されていないが、訳社で講義、学習された唐話を記述した資料として『唐話類纂』（写本）がある¹⁾。『唐話類纂』と『唐話纂要』『唐音雅俗語類』『唐譯便覽』の語句の一致状況を見ると、『唐話類纂』の二字話と『唐話纂要』の二字話、『唐話類纂』の四字話と『唐話纂要』『唐音雅俗語類』の四字話、『唐話類纂』の五字話及び六字話と『唐話纂要』の五字話六字話、『唐話類纂』の五字話と『唐譯便覽』の五字話とに、語句の高い一致状況を確認することができる²⁾。

ところが、高い一致状況から互いの関連がよく見てとれる二字話、四字話、五字話、六字話に対して、三字話は状況が異なる。『唐話纂要』と『唐話類纂』『唐話便使用』の三字話の一致状況を表にすると以下のようなになる。

表1 「三字話一致語」

三字話の収録数が最も少ない『唐話纂要』の三字話で、『唐話類纂』『唐話使用』の三字話にも含まれているものを、『唐話纂要』の羅列順に示した³⁾。

唐話纂要 (72個)	唐話類纂 (35個)	唐話使用 (46個)
意思好	/	意思好
那裡去	/	那裡去
好造化	/	好造化
沒体面	/	沒体面
自讚自	自贊自	/
先不先	先不先	/
動不動	動不動	/
看不看	/	看不看
差不多	差不多	/

1) 太田 1989は、『唐話類纂』から訳社での講義風景を捉えた論考である。

2) 奥村 2014。

3) 『唐話纂要』の羅列順に示しているが、『唐話纂要』の三字話は、意味の近い語句や形の似ている語句が連続している箇所もあるが、無表示で語句が羅列されており、その順序になんらかの明確な基準を見いだすことは難しい。

不曉得	不曉得	／
不曉事	／	不曉事
果然好	／	果然好
不妥貼	不妥貼	不妥貼
沒奈何	沒奈何	沒奈何
沒搭煞	沒搭煞	／
央摸著	央摸著	／
不在行	不在行	不在行
不濟事	不濟事	不濟事
做什麼	做什麼	／
怎麼處	／	怎麼處
有事情	／	有事情
來不企	／	來不企
扯破了	扯破了	／
一齊去	／	一齊去
後頭來	／	後頭來
拿烟來	拿煙來	／
拿茶來	拿茶來	／
灑灑茶	醜醜茶	／
沒相干	沒相干	／
熱得緊	／	熱得緊
冷得緊	／	冷得緊
不要慌	不要慌	不要慌
丟掉了	丟掉了	丟掉了
當不起	／	當不起
定他做	／	定他做
不耐煩	不耐煩	／
不喜歡	不喜歡	／
不敢當	不敢當	／
將就些	將就些	／
不大好	不大好	不大好
用不着	用不着	用不着
打磕捆	／	打磕捆
用不了	／	用不了
錯過了	錯過了	錯過了
但憑你	／	但憑你
名聲好	／	名聲好
喫他罵	／	喫他罵

老臉皮	老臉皮	/
想不出	想不出	想不出
寫不來	/	寫不來
巴不得	巴不得	/
有私畜	/	有私蓄
大千係	/	大千係
有手段	有手段	/
難為人	/	難為人
不容易	/	不容易
肯不肯	肯不肯	/
是不是	是不是	/
幾時來	/	幾時來
不肯降	/	不肯降
沒氣力	沒氣力	/
會騎馬	/	會騎馬
當東西	/	當東西
趕衣飯	/	趕衣飯
夢寐好	/	夢寐好
呆物事	/	呆物事
不肯讓	不肯讓	/
怵東西	/	/
貴起來	/	貴起來
賤起來	/	賤起來
查查看	/	查查看
搜出來	搜出來	/

『唐話纂要』『唐話類纂』『唐話使用』のそれぞれに三字話として収録されている語句の一致状況は、表1に示したとおりである。『唐話纂要』には476個の三字話が収録されており、そのうち『唐話類纂』と一致する語句は35個、『唐話使用』と一致する語は46個（三資料ともに一致する語は10個）である。特に、『唐話類纂』との一致状況に注目すると、『唐話類纂』の二字話及び五字話、六字話の8割以上が『唐話纂要』の二字話及び五字話六字話と一致し、『唐話類纂』の四字話はそれよりやや一致する割合は小さいものの、配列順も含めて高い一致状況が見られるのに比べ、三字話の語句に関しては低い一致状況であると言うべきである。

さらに、『唐話纂要』と『唐話類纂』で一致する三字話に付された日本語を表に示すと次のようになる。

表2 「一致三字話日本語対照」

三字話	『唐話類纂』	『唐話纂要』
自讚（贊）自	なし	自分ニ自分ヲホメル
先不先	ドウデモト云意又ソレハソレデモマツコウシタ 証拠ガアルトイフトキノマツ也先ヅコラヘノ時 ノマツハ又且字也我先不先那裡去你不必得	先達テ
動不動	ウゴクカ動ヌカ又ヤヤモスレバノ意 今年動不 動多雨	ヤヤモスレバ
差不多	ヲヲカタナ是トアレトチガワストキ云也	ヲフカタ
不曉得	シラス	シラス
不妥貼	落ツカヌ 埒アカズ	ラチガアカヌ
沒奈何	セツコトモナイ	シャウコトガナイ
沒搭煞	ラシモナイ 又キタナイ	ラチモナヒモノ
央摸着	大体十人ノコト ——的人ノヒト	シロフト
不在行	フカウシャ トクマワシ 不調法ナコト	フカウシャ
不濟事	ヤクニタタヌ	ラチノアカヌモノ
做什麼	ナニスルゾ	ナニヲナスカ
扯破了	ヒキヤブル	ヒキヤブッタ
拿煙來	なし	タバコモテコイ
拿茶來	なし	チャモテコイ
灑灑茶 ⁴⁾	茶ツゲ	チャヲツゲ
沒相干	用ニタタヌモノ	ヤクニタタヌ
不要慌	ワルイコトスルナ	アハツルナ
丟掉了	ステルコト ⁵⁾	ステタ
不耐煩	コラハラレヌ	心モチガワルイ
不喜歡	スカヌ ウレシウナイ	スカヌ
不敢當	時宣ノコトハ何か モッタイナイト云様ノコト	イタミ入ルト云意
將就些	大体ナコト ソレハヨイカト問タ□大体デゴザ ルト云時云フ差多少ト心少異也	オフカタナ
不大好	アマリヨウナイ	アマリヨクナヒ
用不着	なし	ヨウニタタヌ
錯過了	ユダンシテ居タ	アヤマッタ
老臉皮	ヨイツラノカハ	ツラノカハガアツヒ

4) 『唐話類纂』の原文は「灑」ではなく「[灑]」と書かれている。

5) 『唐話類纂』の原文ではこの上に「豁掉了ステルコト」とあるのに続けて、「同」とある。

想不出	なし	オモヒイダサヌ
巴不得	ドウモナラヌドチラヘドウシテモト云トキドウシテモノ話見	ドフシテモ ⁶⁾
有手段	テナミガアル	テナミガアル
肯不肯	なし	ガテンカガテンデナヒカ ⁷⁾
是不是	ソウカソデナイカ	ユカユデナヒカ
没氣力	病後ナドカノナイコト	力ガナヒ
不肯讓	マケヌコト 買モノナド	マケヌ
搜出來	なし	サガシ出ス

『唐話纂要』と『唐話類纂』の一致する三字話に付されたそれぞれの日本語による意味や説明は、極端な相違点はないとはいえ、そこに積極的な共通点を見いだすこともできず、両者の関係性を決定づける要素が見当たらない。

『唐話纂要』と『唐話類纂』、あるいは『唐譯便覽』『唐音雅俗語類』の三字話以外の文字数により分類された語句と比較すると、語句の一致状況という点で三字話は他と非常に異なっており、語彙から資料間の関係性が読みとれない。写本である『唐話類纂』の二字話からは、訳社における唐話講義の情景も読みとることが可能だが、それはいっぽうで『唐話纂要』と一致する語が多いことによって『唐話類纂』と訳社との繋がりが保証されているからこそ言えることなのだとも言い得るだろう。したがって、語句の一致が少ないという点は、『唐話纂要』や訳社との関連が弱いことを示す一面として捉えることができ、その点において『唐話纂要』をはじめとする岡島冠山の資料における三字話は異質であると言えるだろう。

2 『唐話纂要』三字話の組み合わせ

現代中国語に関し、荒川 2015は「動詞と名詞の自由な結びつきを追求していくとどうしても三文字か、それ以上になってしまうのである」と指摘する⁸⁾。また、荒川 2015は、現代中国語は三文字のまとまりで学ぶことによって基本的な文法ルールを学ぶことが可能であると述べている⁹⁾。つまり、中国語の基本文法や語の使いかたをひとつおりの学ぶことのできる最小の単位が三文字のまとまりであるということであるが、同じことは狭義の唐話にも当てはまるということ

6) 『唐話纂要』の原文ではこの上に「少不得ドフシテモ」とあるのに続けて、「同上」とある。

7) 『唐話纂要』の原文ではこの上に「准不准ガテンカガテンデナヒカ」とあるのに続けて、「同上」とある。

8) 荒川 2015、31頁。

9) 荒川 2015、32頁。

が、『唐韻三字話』によって示されていると言えるだろう¹⁰⁾。

では、それは広義の唐話にも当てはまることだろうか。ここでは、『唐話纂要』の三字話における文法的な成分の組み合わせという視点から、中心となる語が動詞、形容詞、名詞の場合、それぞれ前後にどのような品詞あるいは文法的成分が組み合わされているかに基づいて分類し、三文字によって組み合わせがどのように広がっているかを確認したい。動詞、形容詞、名詞を中心となる語と見なすことが必ずしも適当ではないと思われる三字話については「その他」として提示し、併せて全体像を見ておきたい。

1. 中心となる動詞を含むもの

1-1. 動詞（述語）+ 名詞（目的語）

1-1-1. 様々な一字の動詞

裝体面 破錢鈔 壞体面 取便宜 學唐話 搬房子 租房子 誤大事 偷東西 撰金子
 受苦難 折本錢 熾炭火 陳好事 說歹話 插雙刀 刺長鎗 使長刀 唱曲兒 送人情
 送賄賂 尋門路 生兒子 生女兒 當東西 趕過活 趕衣飯 絆俗務 在貧路 估價錢
 還價錢 講價錢 打秋風 打關節
 做生活 做主張 做買賣 做戲法 做戲文 做舞戲 做媒人 做水人 但憑你

1-1-2. 「有」

有事情 有來因 有胆略 有禮數 有私畜 有過活 有破綻 有手段 有忠義 有好音
 有善報 有討價

1-1-3. 様々な二字の動詞

看顧我 救濟他 擡舉人 報知我 通知你 氣苦人 唾罵人 安慰人 撫慰人 足奉人
 諂事人 恭敬人 齎發他 厭殺人 嚇殺人 愁殺人 違避你 相助你 相幫你 看顧我
 幫襯我 幫助你 販服你 投降你 奸詐人 見怪你

1-2. 名詞（主語）+ 動詞（述語） 飲食進

1-3. 名詞または代詞（目的語）+ 動詞（述語）

這裡坐 別處去 後頭來 那廂坐 這廂坐 個裡來 東廂去 西廂來

1-4. 疑問詞 + 動詞

那裡坐 怎麼處 幾時來 緣何來 為甚去

1-5. 名詞（主語）+ 動詞（述語）+ 名詞（目的語） 你裝烟

10) 奥村 2014で『唐韻三字話』の初歩的な分類を行った。

1-6. 接頭辞 + 動詞 打瞌睡 打磕摑

1-7. 助動詞 + 動詞

1-7-1. 「會」 會說話 會打拳 會騎馬 會彈絃 會打鼓

1-7-2. 「要」 要梟首 定要來

1-7-3. 「不要」 不要去 休要炒 不要等 不要等 不要慌 不可賴 不要管

1-8. 副詞を伴うもの

1-8-1. 「不」

不采他 不理你 不饒你 不勉強 不容納 不見外 不記得 不過意 不喜歡 不中意
不應當 不脫手 不落手 不動問 不罷休 不消說 不比說 不必講 何必去 不肯降
不肯賒 不肯讓 久不見

1-8-2. 「沒」 沒下落 沒着落 沒信行 沒撰錢 沒索價

1-8-3. 「未」 未上手

1-8-4. 「未曾」 未曾見 未曾來 未曾去

1-8-5. 形容詞を伴うもの 不好說 不宜講

1-9. 副詞 (否定以外) + 動詞

1-9-1. 形容詞が副詞として動詞の前についたもの

好胡說 乱磕頭 大喝彩 大悚動 多虧他 老早去 快快走 慢慢去 白白送 暗暗笑

1-9-2. その他の様々な副詞

肯出力 肯納降 樣生有 賭氣喫 一起走 一齊去 重新做 從新寫 倒是好 輪流讀
胡乱寫 權且賒 暫且賒

1-10. 介詞を伴うもの

動詞を伴うもの 憑他做 由他說 同他來 同你去 替我謀

疑問詞を伴うもの 由他怎

1-11. 補語を伴うもの

1-11-1. 方向補語 (目的語を伴わないもの)

丟下去 拾起來 滑起來 亮起來 硬起來 軟起來 摺起來 叫起來 貴起來 賤起來
露出來 推落去 踢下去 脫落來 搜出來 移搬去 收攏來 合攏來 領去了 躲過了
搶了去

1-11-2. 方向補語 (目的語を伴うもの)

拿烟來 拿茶來 担火來 裝火來 丟開手 擡起頭 擡開路 擡住他 抱住他 脫下馬
拔出刀 砍下頭

1-11-3. 樣態補語 縛得緊

1-11-4. 可能補語

1-11-4-1. 肯定形 救得活 解得來 猜得着

1-11-4-2. 否定形

救不活 用不勾 用得勾 拿不穩 捨不得 當不起 忍不住 用不着 用不了 穿不了
想不出 讀不出 寫不來 解不出 猜不來 少不得 使不得 使得了 讀不出 買不成
估不着 查不出 搜不出

1-11-5. 結果補語

丟掉了 捏碎了 踏破了 買着了 躲開了 講和了 標死了 擄殺了

1-12. 助詞を伴うもの

1-12-1. 動詞の直後

隱藏了 躲避了 罷休了 向着火 烘着手 走了風 下了藥 診了脉 斬了首 做了親
娶了妻 買了妾 買了奴 嫁了人 贖了身 圓了夢 倦了些 改了些 讓了些 曾去了
強買了 強賣了 相與過 錯過了

1-12-2. 動詞以外の後 和事了

1-13. 量詞を伴うもの

省用些 湊些水 回些錢 合些藥 種些火 湊些錢

1-14. 重ね型

灑灑茶 捆一捆 絆一絆 關一關 開一開 估估看 查查看

1-15. 疑問詞を伴い疑問文として用いることができるもの

沒什麼 做什麼 為什麼 省什麼

1-16. 使役を表す動詞（兼語文）

央他去 顧人去 定他做 托你寫 煩你去 陶他氣 差人去 着人來

1-17. 受身（兼語文ではない） 喫他騙 喫他罵

1-18. 連動文

側耳聽 放声叫 發恨學 當面說 空口說 毒口罵 劈手搶 劈面打

1-19. 名詞以外の目的語を伴うもの

愛讀書 愛作善 惡作惡 善詩文 只推好 推不知 推有事

一字あるいは二字の動詞の前後に二字あるいは一字を組み合わせた三字話は、上記のように分類した。数量的には動詞＋名詞の組み合わせが最も多く、動詞＋補語、副詞＋動詞の組み合

わせも多いが、完了を表す「了」や量詞を伴うもの、重ね型、連動文の形も含まれており、組み合わせが限られてはいない。

2. 中心となる名詞を含むもの

2-1. 量詞が付くもの 賃隻船

2-2. 副詞（否定）+名詞

2-2-1. 「没」

沒体面 沒道理 沒天理 沒搭煞 沒東西 沒事故 沒來歷 沒相干 沒臊皮 沒規矩
沒緣由 沒胆量 沒禮貌 沒生計 沒方法 沒本事 沒氣力 沒盤纏 沒門路 沒當頭
沒下梢 沒主顧

2-2-2. 「無」 無惡報

2-3. 形容詞+名詞

大成器 大廢料 好生意 老臉皮 厚面皮 現金子 呆物事 体東西 廢物事

2-4. 疑問詞+名詞 多少人

2-5. その他 實落話 典身錢

動詞の後に目的語として組み合わせられている名詞は、中心となる動詞を含むものの中に示したとおりである。ここで挙げた副詞（否定）+名詞は、副詞「没」の後の動詞「有」が省略された組み合わせであるが、漢字の組み合わせの上では動詞がないため、中心となる名詞を含むものとして分類した。形容詞+名詞に関しては、単音節形容詞が修飾語として名詞の前につくパターンである。

3. 中心となる形容詞を含むもの

3-1. 名詞（主語）+形容詞（述語）

華費多 風俗好 包管好 名声好 病症好 脉色好 盤費大 關係大 意思好 力氣大
世務多 夢寐好 詐計多 價錢貴 價錢賤

3-2. 副詞+形容詞

3-2-1. 「不」

不耐煩 不辨白 不通曉 不相等 不相齊 不大好 老大好 不當好 不大美

3-2-2. 程度を示す副詞を伴うもの

大富貴 大貧窮 大干係 大忠孝 大謙虛 好生熱 好生涼 真正妙 委實好

3-2-3. 様々な副詞を伴うもの

果然好 仍旧好 依旧疼 仍然好 依然好 當真好 只怕遲 恐怕早 恐其早

3-3. 補語を伴うもの

熱得緊 冷得緊 嚴得緊 涼得狠 涼得緊

3-4. 助詞を伴うもの

3-4-1. 「了」 病兜了 端正了 尚早了 忒大了

3-4-2. 「地」 平白地 搶白地

3-4-3. 全体で名詞となるもの

3-4-3-1. 「人」 正謹人 曉事人 濟事人

3-4-3-2. 「的」 手緊的 慳懶的 閑張事 緊要事 生硬的

形容詞が副詞的な働きをしているものは、中心となる動詞が含まれるものの中で取り上げた。形容詞が述語として用いられる場合は、すべて一字の形容詞であり、形容詞の前に副詞を伴った形は見られない。形容詞の重ね型は、中心となる動詞が含まれるものの形容詞が副詞として動詞の前についたものとして取り上げた。

4. その他

4-1. 反復疑問 是不是 看不看 准不准 肯不肯

4-2. 近い将来を表す 就要去 就要做

4-3. その他

決不肯 不敢當 不能勾 為人好 難為人 不為你 央摸著 將就些 決不敢 千万你肯為你 再不可 沒有了 撩天話 自讚自 去了來 巴不得 難信徒 說是好

上のその他では、構文や三字のまとまりの強いものや、動詞、名詞、形容詞を中心に分類した場合に取り上げにくいものを挙げた。

上に示したように、三字の組み合わせは、二字では成し得ない組み合わせや表現し得ない意味を示すことが可能である。三字の組み合わせは多くがフレーズであり、独立した文としては不足している部分があるが、独立していないがゆえに、さらに語を組み合わせることが可能であるともいえる。たとえば、『南山俗語考』の六字、九字、十二字の語句は、三字からなるフレーズを組み合わせたものであるが、その切り離された三字フレーズが『唐韻三字話』に三字話

として収録されていることを見れば、三字フレーズが組み合わせのきくひとまとまりとして受け入れられていたと推測できる¹¹⁾。

ただし、『唐話纂要』には三字話が収録されてはいるものの、それらをさらに別の語句と組み合わせではおらず、三字話の持つ組み合わせがきくという特質が生かされているとは言えないようである。

3 狭義の唐話資料との違い

『唐韻三字話』は、三字話を集めた資料であり、記述年代や記述者等の詳細は不明だが、薩摩藩第25代藩主島津重豪の命により刊行された『南山俗語考』（文化9（1812）年）の三字話との一致や、『南山俗語考』の六字、九字、十二字の語句の一部が、『唐韻三字話』の三字話と一致する語句が組み合わせられたものであることなどから、両者には何らかの関連があるのではないかと考えられる¹²⁾。『南山俗語考』が刊行された薩摩は、唐通事養成に熱心であり、長崎に派遣して唐話を学ばせ、独自に唐話書を編纂していた¹³⁾。『南山俗語考』の『唐韻三字話』との語句の一致は、そうした過程で起こり得たものだと考えられるだろう。『唐韻三字話』を狭義の唐話資料と位置づける所以である。

広義の唐話資料に属する『唐話纂要』三字話と、狭義の唐話資料に属すると見なし得る『唐韻三字話』とは、以下の違いがある。

1. 数量表現

『唐韻三字話』では量詞が豊富に用いられているが、『唐話纂要』では「些」と「隻」のみであり、「些」は動詞との組み合わせに限られ、「隻」は「船」を数える量詞として一例のみ見られる。『唐韻三字話』の量詞の用例は次のとおりである。

一个月 是幾個 這一箇 是幾位 這半張 一把刀 這件藥 一椿貨 好幾項 一兩樣
讀一首詩 這一門 摘一枝 一刃頭 一疋馬 兩隻雞 一層皮 好幾等 有一坛 二三錢

11) 『唐韻三字話』と『南山俗語考』の継承関係は明らかではない点も多いが、一致状況からは無関係であるとはいいがたく、三字フレーズを組み合わせのきくひとまとまりとして受け入れていたのは、『唐韻三字話』を記述、使用した人々とも、『南山俗語考』を編纂した人々とも言える。

12) 奥村 2014。『唐韻三字話』と『南山俗語考』の語句の一致から何が言えるのか、また両者にはどのような関連があるのかは、さらなる調査が必要であるが、筆者は、『唐韻三字話』が長崎、『南山俗語考』が薩摩という地域性から、語句の一致状況には何らかの理由があるはずだと考えている。

13) 武藤 1926。

五銖錢¹⁴⁾ 多幾分 一百年 好半日 挨兩天 笑一場 吃一口 請雙杯 進一步 露一宿
 一滴兒 一丟兒 一塊兒 一点兒 一些兒 一片兒 一枝兒 一朵兒 一件兒 一顆兒
 一把兒 一枚兒 半个兒

2. 語氣助詞

『唐韻三字話』では語氣助詞が以下のように用いられている。

阿 未必阿 好歎阿 好雨阿 好詩阿 狠的阿 不來阿 多慢阿 失陪阿 力牢阿
 還多阿 拿牢阿
 罷 請便罷
 了 告別了 不送了 不用了 路干了
 哩 又歎哩 就跑哩 話長哩 怎樣哩 完是哩
 喇 下雨喇 還未喇 不要喇 歇足喇 遠勞喇
 囉 正是囉
 里¹⁵⁾ 呀 來里呀
 麼 曉得麼 記得麼 吃乳麼 完了麼 讀得麼 自然麼 不用麼 去了麼 在家麼
 不痒麼 明白麼 走得麼 也好麼
 么 也是么
 呢¹⁶⁾ 勾了呢

『唐話纂要』三字話では語氣助詞は「了」のみである。中国語は語氣助詞を添えることによって独立した文として座りが良くなる場合があるが、『唐韻三字話』の語氣助詞を伴う三字話は、この三字話だけで自然な中国語として使用できると言える¹⁷⁾。語氣助詞の種類がより豊富であることから、『唐話纂要』三字話よりも、『唐韻三字話』には独立した文として使用することのできるパターンが多いと言えるだろう。

3. 比較表現

『唐韻三字話』には複数の比較表現が見られるが、『唐話纂要』では比較表現の形式は見られ

14) 『唐話類纂』にも一致する三字話が見られる。

15) この「里」は語氣助詞ではない可能性がある。

16) 選択疑問を示す語句も収録されている。「多呢少」「熱呢冷」「要寫呢 不要寫」。

17) 荒川 2015、32頁～34頁。ただし、三文字はたしかに基本的な単位ではあるが、無理に三文字に収めようとすると少し不自然になる場合もあると指摘している。

ない。『唐韻三字話』に見られる比較表現は以下のとおりである。

好似他 貴似他¹⁸⁾

不如你 不如他 不如我

勝過你

『唐韻三字話』では三字で表現可能な比較の言い方が収録されているが、『唐話纂要』三字話では比較表現はない¹⁹⁾。教科書という側面では、『唐話纂要』の三字話では比較表現に触れることはできないということになる。

4. 兼語文²⁰⁾

『唐韻三字話』にはそれ自体が使役の意味を持つ動詞「請」「叫」「教」「讓」が用いられているが、『唐話纂要』三字話にはこれらの使役動詞は用いられておらず、「央」「顧」「定」「托」「煩」「陶」「差」「着」が用いられている²¹⁾。いずれも兼語文の形をとり使役の意味で用いられているが、語彙がまったく異なっている。

5. 介詞の種類

『唐話纂要』三字話の介詞の種類は少なく、「憑」「由」「同」「替」であり、『唐韻三字話』は「把我看」「替我考²²⁾」「同你走」「和他說」「向他說」「由我說」が用いられ、僅かな差とはいえやや多い²³⁾。

18) 『唐韻三字話』にはそれぞれに日本語訳が付され、「好似他 彼ガヨウニヨイ」「貴似他 彼ガヨフニタットイ」とあるが、前者は「～のように」という意味になる場合は「好像」と同様に「好似」で「～のように」を表し、「良い」という意味は生じないのではないだろうか。この三字話はどちらも、「形容詞+似～」の形で、「～より…」という比較の意味を表すのではないだろうか。『唐韻三字話』の三字話と日本語訳が同一人物によって同時に記述されたかどうかは不明であり、三字話を理解するうえで日本語訳をどこまで参考にすべきかの判断は難しい。

19) 『唐話纂要』四字話以上では比較表現を確認することができる。

20) 兼語文の受身に用いられるものは、『唐韻三字話』『唐話纂要』ともに見られない。受身には共通して「喫(吃)」が用いられている。『唐韻三字話』の用例は「吃了驚」、『唐話纂要』の用例は中心となる動詞を含むものの1-17で提示している。

21) 太田 1958では、兼語動詞の使役に用いられるものとして、「叫」「使」「讓」について歴史的に論じ、それとは区別してふつうの動詞による兼語句で使役を表す場合の用例を挙げている。『唐話纂要』三字話では太田 1958で兼語動詞の使役に用いられる「叫」「使」「讓」は見られないが、「着」「央」ははじめ使役性の強い動詞が用いられている。

22) これには日本語訳は付されていないが、この他の用例には「替他辞 他ニカハリテ辞退スル」「替他告 他ガカハリニツゲル」「替他憂 アレガウレイニカハル」のように「替」を「カハル」と訳している。

23) 他に「朝天的」「朝上の」があり、「朝」は介詞ではなく動詞として用いられているが、ここに付記して

『唐話纂要』と『唐韻三字話』の個々の語を比較すると、さらなる語彙の違いは出て来るものと考えられるが、ここで示した5点は大きな違いであると言えるだろう²⁴⁾。

まとめ

現在の中国語教育でも三文字に注目した学習法が取り入れられているように、中国語を二字話、三字話、四字話のように、文字数で分類する学習方法は、唐通事の間で実践され、中国語の音節と声調をリズムカルに身につけることができるという効果を当時の中国語を学び用いていた人々はすでに身をもって知っていたのだろう。特に、『唐韻三字話』と『南山俗語考』に現れた、複数の三字話の組み合わせからは、中国語を習得し実用するために欠くことのできない学習法だったことも推測できるだろう。

その形式は、唐話が唐通事の手を離れた後も引き継がれ、岡島冠山の資料では二字話、三字話、四字話、五字話、六字話のように、唐話が分類されている。ただし、四字話が二字話の組み合わせではないように、『唐話纂要』では四字以上の語句の中に三字話に分類された語句が含まれているわけではなく、それぞれに独立した存在である。『唐話纂要』を見るかぎりでは、形式こそ唐通事の学習法を引き継いでいるが、三字話の活用法は引き継がれなかったのではないだろうか。

参考文献

- 武藤長平 1926『西南文運史論』岡書院。56～57頁。
 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』（本論は2013年朋友書店刊行新装再版を参照した。）
 太田辰夫 1989「訳社の無礼講」『汲古』第15号。69～72頁。
 奥村佳代子 2009「『唐話類纂』考—他資料との関係から—」『アジア文化交流研究』第4号。251～261頁。
 奥村佳代子 2014「唐話資料史における『唐韻三字話』—『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較—」関西大学『東西学術研究所紀要』第47輯。1～17頁。
 林修三 2015『三文字エクササイズ中国語1200—伝わる！使える！三文字会話・フレーズ集』東方書店。
 荒川清秀 2015「三文字ならなんとかなる！—三文字学習法のすすめ—」（書評）『東方』416号。30～34頁。

おく。

- 24) また、本論では『唐話纂要』に見られる「善詩文」「縁何來」のような三字話には踏み込めていないが、『唐話纂要』には書き言葉的、文言的な語句や表現が含まれ、『唐韻三字話』には含まれないといえる。